

ウトナイ湖・勇払原野保全プロジェクト 野鳥誌掲載記事

＜勇払プロジェクト一歩前進！ 北海道による保全事業計画に反映＞

(No.666 2003年7月号 p.33)

＜勇払保全プロジェクト オオジシギでシギ・チドリネットワーク参加を目指して＞

(No.656 2002年8月号 p.35)

＜勇払保全プロジェクト 希少種調査が進行中＞

(No.646 2001年9/10月号 p.50)

＜勇払原野に迫る I T E R 計画に誘致反対の陳情提出＞

(No.642 2001年5月号 p.38)

＜ウトナイ湖サンクチュアリ、次の 20 年に向けて＞

「ウトナイ湖・勇払原野保全プロジェクト」がスタート

(No.634 2000年8月号 p.46-47)

● <活動>

勇払保全プロジェクト一歩前進！ 北海道による保全事業計画に反映

(No.666 2003 年 7 月号 p.33)

シマアオジ、チュウヒなどの希少鳥類が繁殖し、オオジシギやガン・カモ類の重要な中継地となっている勇払原野。本会では、未利用工業用地として残された貴重な鳥類生息地をウトナイ湖と一体で保全することを目的に、その基礎資料の蓄積のため 1999 年から鳥類調査を行ってきました（本誌 2001 年 4 月号特集、9・10 月号 50 頁、2002 年 8 月号 35 頁参照）。この取り組みが北海道などの行う保全事業に反映され、一つの実を結ぶこととなりそうです。

今年の 3 月末、北海道、苫小牧市、株式会社苫東などで構成する「苫小牧東部開発連絡協議会」は、苫小牧東部開発用地となっている勇払原野の一部を「自然と共生するアメニティ空間」として保全していく基本方針をまとめました。方針では、本会が行っている鳥類調査が取り上げられ、こうした動きと連携しつつ計画を進めることが必要、と記されています。保全対象地域も、本会の重要と考える地域と対応しています。

同時に道では、千歳川放水路予定地だった安平川の新たな治水計画として、同工業用地の一部を遊水池に活用し、保全に配慮した河川管理を進める方針も決定しました。今年 3 月末に発足し、本会ウトナイ湖サンクチュアリの葉山政治チーフレンジャーが委員として参加している「安平川河川整備計画検討委員会」で、具体的な計画が立てられる予定です。

本会ではこれまでの調査結果をまとめ、ウトナイ湖を含めた勇払原野の広域的保全計画を検討中です。まずは、北海道、苫小牧市、苫小牧東部開発協議会の英断に敬意を表し、勇払原野が将来にわたって重要な鳥類生息地としての役割を果たすとともに、次代へ受け継がれる財産となるよう、さらに関係諸機関に提言をしていきたいと考えています。

(自然保護室)

● <活動>

勇払保全プロジェクト オオジシギでシギ・チドリネットワーク参加を目指して
(No.656 2002年8月号 p.35)

これまでも本誌でご紹介してきましたように、勇払原野はそのほとんどが苫小牧東部開発事業用地(約1万700ha)となりましたが、事業が事実上破綻したため大半が未利用地として残され、希少鳥類の重要な生息地となっています。本会では、ウトナイ湖と勇払原野を一体とした広域的保全のために「ウトナイ湖・勇払保全プロジェクト」を進めており、現在保全構想策定のための鳥類調査を行っています(本誌2001年4月号、9/10月号参照)。ここでは、これまでの調査結果を中心に、オオジシギについてご報告します。

●日本とオーストラリア間を渡るシギ

オオジシギは日本と極東ロシアの一部で繁殖し、オーストラリア南東部やタスマニア島に渡って越冬する中型のシギ類で、**Japanese Snipe**(日本のジシギ類)という英名でも呼ばれます。環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に指定されているほか、日豪渡り鳥保護協定のリストに入っており、オーストラリアでは生息地劣化などによる個体数の減少が懸念されているようです。現在、オーストラリアでは環境保護及び生物多様性保全法に基づき、保護のための行動計画が立案されています。

●重要な渡りの中継地

ウトナイ湖は1980年代に行われた標識調査によって、オオジシギの渡りの中継地として重要であることが明らかとなっています。勇払川の河川改修からオオジシギの生息環境を守ることを目的に、1988年8月～9月にかけて行われた標識調査では、19日間で合計133羽が捕獲されました(注)。



本会では昨年から、勇払原野についてもオオジシギの生息状況を把握するため、繁殖期における勇払原野のオオジシギ分布調査を実施しています。これまでの調査から、オオジシギは苫小牧東部開発地域のかかなりの区域に生息することが確認されました(図参照)。

また、昨年7月～8月にかけて勇払原野南部の弁天沼周辺において標識調査を行った結果、410羽のオオジシギが捕獲され、ウトナイ湖のみならず勇払原野も、渡りの中継地として重要であることが明らかとなりました。

●シギ・チドリネットワークへの参加へ向けて

本会ではこうした調査結果を背景に、ウトナイ湖・勇払原野の「東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類重要生息地ネットワーク」への参加を目指しています。重要生息地ネットワークとは、ラムサール条約会議でその推進が決まった取り組みで、「渡り性水鳥を保護するためにはその渡り経路に沿って湿地を保全することが必要である」という考えに基づき、重要生息地のネットワーク化を図りつつ保全を推進する活動です。現在、アジア・太平洋地域では、シギ・チドリ類、ツル類、ガンカモ類の3つのネットワークが構築され、日本とオーストラリアの環境省の支援のもと、重要湿地保全のための活動が進行中です。

昨年標識された410羽という個体数は、全世界のオオジシギの推定個体数3万6千羽の1%を越えており、シギ・チドリネットワークへの参加基準を満たしています（本誌2001年9/10月号参照）。

今年の標識調査では、オオジシギにカラーリングを装着する予定です。カラーリングによって越冬地であるオーストラリア等での観察例が増え、ウトナイ・勇払原野と越冬地との関係がより明らかとなってくることが期待されます。

今後も、オオジシギをはじめとした基礎調査の結果に基づき、ウトナイ・勇払の保全を進めていきたいと考えています。

（自然保護室）

（注）標識調査の結果などから、改修計画はオオジシギの利用地域に影響が出ないよう一部変更されました。

● <活動>

勇払保全プロジェクト 希少種調査が進行中 (No.646 2001年9/10月号 p.50)

ウトナイ湖に隣接する勇払原野は、ほぼすべてが苫小牧東部開発事業用地（面積約 1 万 700ha）となりましたが、事業は頓挫し大半が未利用のまま残っています。本会では、ウトナイ湖と勇払原野を一体とした広域的保全が課題と考えられることから、勇払原野の自然環境の調査と保全構想の策定を行う「ウトナイ湖・勇払原野保全プロジェクト」を進めています（本誌 2001 年 4 月号特集を参照）。

●勇払原野に生息する希少鳥類

現在、このプロジェクトでは、勇払原野に生息する希少な鳥類の生息状況把握を行っています。繁殖期に勇払原野で見られる野鳥のうち、環境省のレッドリストにあげられているものは、絶滅危惧ⅠＢ類ではサンカノゴイ、オオヨシゴイ、オジロワシ、絶滅危惧ⅠⅠ類ではオオタカ、チュウヒ、準絶滅危惧ではオオジシギ、シマアオジの 7 種があります。このうちオジロワシは、勇払原野では繁殖はしていないようですが、他の 6 種は繁殖が確認されているか、またはほぼ間違いなく繁殖していると考えられるものです。またこれら以外に、渡りの時期や越冬期に見られる種類として、絶滅危惧ⅠⅠ類のヒシクイ、オオワシ、準絶滅危惧のマガン、オオヒシクイがあります。

●オオジシギが少なくとも 410 羽

派手なディスプレイ・フライトで知られるオオジシギは、勇払原野の各所で見られます。これまでの観察から、勇払原野ではオオジシギは繁殖期後から秋の渡り初期に多く見られることがわかっていました。そのため、今年 7 月下旬から 8 月中旬にかけ、勇払原野内の弁天沼周辺で標識調査によって個体数を調べました。その結果、この時期に少なくとも 410 羽は確実に勇払原野に生息していることがわかりました。

●“シギ・チドリ類ネットワーク”参加基準に到達

この 410 羽という数は、ラムサール条約締約国会議で発足した「東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類ネットワーク」の参加基準を超える数です。同ネットワークの参加基準は、

1. 定期的に 2 万羽を超える渡り性シギ・チドリ類が利用している。
2. 定期的に特定の種（亜種）の推定個体数の 1%を超えるシギ・チドリ類が利用している。
3. 絶滅のおそれのある種（亜種・地域個体群）に属する渡り性のシギ・チドリ類がある程度利用している。

の3つです。オオジシギの総個体数は3万6千羽と推定されていますので、2番目の基準である推定個体数の約1%以上を超えています。

●オオジシギの分布

個体数だけではなく、繁殖期の勇払原野内でのオオジシギの分布を把握するために、オオジシギのいそうな場所全体に1km四方の区画（メッシュ）を設定し、各区画でオオジシギの生息を確認する調査も行いました。その結果、勇払原野のかなり広い範囲に分布しており、既に工場向け分譲用地として造成された場所や、核融合実験炉の誘致候補地（野鳥誌5月号38ページ参照）にも生息していることが確認されました。先の個体数から見ても、勇払原野はオオジシギにとって重要な生息地になっています。

この他、サンカノゴイやチュウヒの繁殖調査、シマアオジの生息数調査、ガン類の採餌場所調査などにも取り組んでいます。保護上の理由から希少種の繁殖状況などについてはご報告できませんが、今後も調査を継続して勇払原野の保全につなげていきたいと考えています。

（自然保護センター）

● <活動>

勇払原野に迫る I T E R 計画に誘致反対の陳情提出 (No.642 2001 年 5 月号 p.38)

■地上に人工の太陽

I T E R とは、国際熱核融合実験炉 (International Thermonuclear Experimental Reactor) の略称で、イーターと呼ばれます。核融合は、水素や重水素などの軽い元素の原子核同士が衝突してヘリウムなどに変わることで、この時に大きなエネルギーを放出します。太陽も水素を燃料とした核融合反応によってあのように輝いています。

熱核融合炉は、この太陽で起こっている現象を人工的に作りだし、そこから熱エネルギーを取り出すもので、1 g の重水素と三重水素 (トリチウム) から石油 8 t 分のエネルギーが得られると言われています。重水素やトリチウムの元になる水素は海水中に大量にあるため、核融合が実用化されればエネルギー問題の解決になるとされます。

■勇払原野が候補地に

I T E R 計画は、1985 年の米ソ首脳会談がきっかけでスタートしました。それに欧州が加わり 88 年には日本が参加して日米ソ (露) 欧の 4 極による推進体制が確立しました。しかし 98 年にアメリカがこの計画からの撤退を表明。その後、日露欧の 3 極で進められています。

これまで研究開発と設計が進められていましたが、いよいよ実験炉建設場所を選定する段階に入ってきました。2001 年度の早い時期には 3 極の政府間協議により建設場所が決まる見込みですが、建設費は一説には 5 千億円とも言われ、建設国が一番多く負担することになっています。そのためロシアの財政的事情や欧州での原発閉鎖の流れなどから、日本での建設が最も有力と見られています。

日本国内の候補地は、茨城県那珂町、青森県六ヶ所村、北海道苫小牧市の 3 か所とされています。この内、苫小牧市の候補地は、勇払原野の中でも自然環境が良く残っている場所で、ウトナイ湖からは 7 km ほどのところです。

■誘致反対の陳情を提出

エネルギー問題の解決が期待される熱核融合炉ですが、I T E R が稼働を始めると大量の放射線廃棄物が出るとされており、それらは地元での処理が求められています。また核融合の燃料に使うトリチウムは、1 g で 1 千人の致死量にあたる放射性物質です。その上、苫小牧の候補地はウトナイ湖に近いだけでなく、サンカノゴイやチュウヒの繁殖地で、ガン類やオオジシギの渡りの重要な中継地にもなっています。

そのため本会では、昨年 12 月に苫小牧市議会議長に対して誘致の反対陣情を、苫小牧市長に対しては誘致中止を求める要望を行いました。今後もウトナイ湖や勇払原野の保全のために働きかけを続けていく予定です。

提出した陳情・要望書は、本会ホームページに掲載しています。また、ITER計画や
苫小牧への誘致については、北海道ITER誘致期成会のホームページが、ITERの問題点～については「ITERの苫東誘致に反対する会」のホームページが参考になります。
(自然保護センター)

● <活動>

ウトナイ湖サンクチュアリ、次の 20 年に向けて

「ウトナイ湖・勇払原野保全プロジェクト」がスタート

(No.634 2000 年 8 月号 p46・47)

■原生自然の残るウトナイ湖・勇払原野

本会ウトナイ湖サンクチュアリは来年、設立 20 周年を迎えます。たくさんの方々の寄付金によって第一号のサンクチュアリとして誕生して以来、ウトナイ湖サンクチュアリは、道内の自然環境保全の拠点として、また国内初のサンクチュアリとして、重要な役割を果たしてきました。国内屈指の渡り鳥の渡来地でもあり、1991 年には、ラムサール条約登録湿地に指定されています。

ウトナイ湖を含む一帯は勇払原野と呼ばれています。千歳空港から車で約 30 分、札幌市からでも 1 時間半程度と便利な場所なのですが、今も原始的な自然環境が残っています。湿原にはシマアオジやノゴマ、オオジシギ、コヨシキリなどが生息し、数つがいのチュウヒも繁殖しています。人が足の踏み入れることの少ない大小の湖沼や森林もあり、なかでも最大級の面積を持つ弁天沼は、ウトナイ湖と並ぶガン・カモ類の渡来地です。



■巨大開発計画とその破綻

勇払原野は農地として開拓が行われていたのですが、空港に近く、海にも面していて便利のため、1969 年に大規模工業基地として開発する苫小牧東部開発計画がスタートしました。開発面積は約 1 万 700ha で、東京の JR 山手線の内側の約 1.7 倍にあたる巨大な開発計画です。当初は予定どおりに進んでいるかに見えたこの計画ですが、70 年代のオイルショックや全国的に高まった公害反対運動の影響、その後の円高の進展やバブルの崩壊により企業進出は思い描いたとおりにならず、第三セクターで事業を進めていた苫小牧東部開発（株）が 99 年 9 月に倒産。巨大計画の破綻が露呈します。

その後、事業を引き継ぐかたちで（株）苫東が設立され、現在も企業用地の分譲が行われていますが、この不況の折り、企業進出は順調といえる状況ではないようです。勇払原野に良好な自然環境が残されてきたことには、売れない土地が長い間放置されてきたという背景があるのです。

■積極的な環境復元の場に

今のところ大規模な企業進出はなさそうですし、比較的自然環境のよい地区は当面分譲しない予定になっているようです。しかし、核融合実験施設を誘致しようという動きもあり、当面分譲をしない地区も（株）苫東の所有地で何かの保護規制がかかっているわけではありませんので、長期的にはとても安心できる状態ではありません。高度経済成長の時代を経て、環境の時代といわれる今、私たちの貴重な財産であるこの原野を、従来型の開発で失ってしまってはなりません。むしろ、昔の農地開拓や分譲用地の造成で面積が狭められたり環境が悪化した湿原を再生・復元し、護岸され直線化された川の護岸をやめ蛇行させるなど、保全とともに積極的な環境復元の試みがなされるべきでしょう。またこのような環境復元の技術開発とその技術を学ぶ研究施設の整備やエコツーリズムなど、これまでウトナイ湖で蓄積してきたノウハウを生かし、自然環境を保全、活用しながら地域の発展に役立てていくことが必要です。

進出している企業にとっても、今後は環境を重視した事業展開が求められる時代です。こうした環境の保全、活用への協力やそういう地域への立地は決してマイナスになることはないでしょうし、地元苫小牧市にとっても価値のあることと思われます。国内はもとより東アジア各地で湿地環境の減少が危惧されるなか、企業、行政、NGOが協働し、お互いに魅力ある構想を提案、実現できれば、自然環境を地域づくりの核に据えた新しい環境保全型都市のモデルを国内外に示すことができるでしょう。

■ウトナイ湖の永続的な保全に向けて

このような考え方から、本会の「ウトナイ湖・勇払原野保全プロジェクト」はスタートしました。ウトナイ湖を拠点とした勇払原野一帯の自然環境の保全と、自然環境を生かした地域づくりを提案するための基本構想の構築に、今年度から3年間をかけて取り組みます。初年度である今年は、鳥類の調査を中心に、勇払原野の自然環境、それを取りまく社会状況など、基礎的な情報の収集を行います。その第一段階として、この6月、現地の鳥類の繁殖調査に取りかかりました。

ウトナイ湖サンクチュアリが現在の良好な自然環境を永続的に守っていくためにも、ウトナイ湖に注ぎ込む美々川の源流からウトナイ湖、そして太平洋へと連なる勇払原野の自然環境は一体的に保全していかなければなりません。数10年にわたって美々川とウトナイ湖の自然を脅かしてきた千歳川放水路計画も、本会などの粘り強い活動が実り、昨年、中止となりました。この20年間の活動をバネに、またこの次の20年に向けて、自然保護と地域の発展が両立し、補い合う新しい地域計画のあり方を探るため、このプロジェクトをこれから積極的に展開していきます。

どうぞご協力お願いします。（坪本なおみ／自然保護センター）